

## 教育研究所 所蔵図書 内容紹介

神永正博（東北学院大学工学部電気情報学科准教授）著

### 『学力低下は錯覚である』

森林出版株式会社、2008年

経済学部教授 菅山 真次

#### 1

本書は、現在東北学院大学（以下、本学と略記する）工学部で教鞭をとっている著者が、自身にとってもっとも身近で、かつ深刻な問題である大学生の学力低下問題を、しかしあくまでも冷静に、客観的な統計データにもとづいて論じたものである。学力問題に限らず、およそ教育をめぐる議論の厄介なところは、誰もが一家言をもち、それゆえ往々にして論点がまったくかみ合わないところにある。こうした状況の下で、著者が選択したアプローチは、ウェブや書籍、論文など、できるかぎりたくさん2次文献を渉猟して基本的な統計データを作成し、推論を交えつつ、分析結果と整合的な解釈を展開する、まことにオーソドックスなものであった。このような著者の基本的スタンスは、「議論が統計データに基づいたものになれば、多くの論争に決着がつくだろう」（137ページ）という、科学者としての健全な〈常識〉に裏打ちされているといえよう。

はじめに、本書の構成を示しておこう。

1. 大学生の学力低下の実態
2. ゆとり教育は学力低下の原因か
3. 理工系離れを考える
4. 教育の今後を考える——いま何をすればよいのか——
5. 望ましい教育システムとは

#### 2

さて、著者は、まず1. で自らの本学における教育実践をケースとして引用しながら、学力低下の実態を描き出している。その語り口は冷静で、それゆえにいつそう迫力をもって読者に迫ってくる。少なくとも、本学の経済学部で講義を行う評者には、まさに情景が目に浮かぶほどリアルに感じられた。

たとえば、著者が担当するある必修科目では、再履修者があまりに多く、学部で最も大きい教室でも収容人数を超えてしまうため、講義のレベルを大幅に下げた。そして、「講義」

を行うのは学生の集中力が続く30分ほど、あとは事実上「演習」に当てることにした。その結果、教える内容は4年前の赴任当時の半分になったという。試験もできるだけやさしくし、講義中にやった問題さえきっちりやれば満点が取れるようにした。さらに、試験前2コマは、類似問題を解く試験対策の時間にあてた。それでも、どうしても合格点に達しない学生が20-25%の割合で出るという。

それだけではない。何とか合格しても、内容をすぐに忘れてしまう学生が多いのだ。

「一変数の微積分をすっかり忘れた学生に、多変数の微積分を教え、ガウスの発散定理を教えるのである。何度積み上げても崩れてしまう。

おそらく、賽の河原とは大学のことなのだろう。とにかく、講義時間だけではどうしようもない。万策尽きた感があった。」(8ページ)

昔と比べれば、大学の講義は格段にわかりやすくなっている。授業評価アンケートが一般化し、その結果が教員にフィードバックされるという現状では、とにかくやさしく、丁寧にならざるを得ない。教科書や参考書もここまでするくらい行き届いている。教育設備や学習サポート体制については言うまでもない。著者は問う。それでも、大学生の学力が低下しているのであれば、犯人はどこにいるのか、と。

### 3

2. は、その犯人探しを行う、本書の中心的な部分といえる。

まず、筆者が取り上げる有力な容疑者が、「ゆとり教育」である。ゆとり教育の定義はさまざまであるが、本書では、学習指導要領が全面的に改正され、学習内容・授業時間の削減が始まった1980年をもって「広義のゆとり教育」の開始年とみなして、議論を進めている。「ゆとり教育犯人説」とは、こうしてすべての日本国民が学ぶ小学校・中学校、ほぼすべての国民が学ぶ高校の学習内容・授業時間が大幅に削られてしまった結果、学力が全般的に低下したことに原因をもとめる説であるから、それは事実上、「全般的学力低下説」と等値であるといえよう。

このような見方は、テレビ・新聞や週刊誌など、マスコミで盛んに取り上げられているだけではない。ある日、著者は、講義の最中に思わず「こんなこともわからないのか」ともらしてしまったが、その時学生がつぶやいた次の一言に衝撃を受けたという――「俺たち、ゆとられちゃってますから」。もはや「ゆとり教育犯人説」は、その「被害者」とされる学生本人、そして、文部科学省をいつも悪者にして溜飲を下げている大学教員の多くが、意識していると否とにかかわらず絡めとられている、「通念」となっているのだ。

しかし、著者は、さまざまなデータの検証を通して、こうした全般的学力低下説を否定す

る。たとえば、マスコミがよく取り上げるのが、2つの国際的な学力検査——OECD（経済協力開発機構）による「生徒の学力到達度調査」（PISA）とIEA（国際教育到達度評価学会）の「国際数学・理科教育動向調査」（TIMSS）——の最近の結果である。21世紀にはいって、日本の小・中学生が調査されたすべての項目で大きく順位を下げていることが、その「動かぬ証拠」とされる。ところが、これらの調査は、いずれもこの間、調査対象国数が大幅に増えており、この点を考慮して「標準化された順位」を算出すると、次のようになる。

「OECDの結果では、数学的リテラシーで順位を徐々に下げているが、その他は上下している。IEAでは、算数、数学で順位を上げ、理科はあまり違いがない。」（30ページ）

つまり、諸外国との比較で見ても、日本の子供たちの学力が低下しているという明白な証拠はなく、日本の成績は現在でもトップ・クラスにあるのである。著者は、ほかにもさまざまなデータを検証し、——本書のタイトルが示すように——学力低下は統計的な錯覚であるとする議論を展開していく。それでも、著者が、「家庭学習を全くしない高校生は増えており、高校進学率の増加を考慮しても、学習する層と学習しない層への二極化が進行している」（93・94ページ）ことを認めている点は、留意しておこう。

こうして「ゆとり教育」を無罪放免した上で、著者は新たな重要な容疑者を指し示す。「18歳人口の減少」がそれである。大学関係者なら誰もが知っているように、18歳人口は1990年代初頭から急速な縮小過程に入り、1992年の205万人から2007年の130万人へと、実に4割近くも減少した。他方、大学の入学定員数はこの間むしろ増加した。いま、(日)大学への進学は学力のみで決まり、(月)18歳人口の学力分布は不変である、と仮定すれば、このことは、従来と比較してはるかに多くの成績下位者が大学へ進学するようになったことを意味する。その結果、日本中のすべての大学で、学力的にみてマージナルな入学者のレベルは大きく低下せざるを得ない。

それでは、果たしてどの程度下がるのか。著者は、既述のような仮定（および大学の入学定員は一定とする）において、2007年受験生の学力偏差値は、1992年受験生ならばどのようなレベルの値に換算されるか、という数量分析を行っている（図8、40ページ）。その分析結果によれば、2007年の偏差値50の学生は、1992年でみると偏差値42程度にあたる。このような偏差値の低下の度合いは、レベルが上の層では小さいが、下のほうになればなるほど急激に大きくなる。2007年の偏差値48の学生は、1992年では偏差値35にしかならない。偏差値45程度だと、ついに換算できず、「低すぎて見えなくなる」という。

変化のマグニチュードの大きさに、あらためて驚かざるを得ない。

だが、もし著者の言うように、大学生の学力低下をもたらした真犯人が「18歳人口の減少」であるとすれば、問題の根は深く、前途はいよいよ暗い。というのも、人口動態ほどトレンドが長期にわたって安定しており、不可逆性が強い経済変化はほとんど知られていないからである。国立社会保障・人口問題研究所の推計に基づく、著者の計算によれば、18歳人口は2019年ごろまでは落ち着いているものの、20年から再び急速な減少局面に入り、26年には中位推計で100万人を切る。06年と比べて、-26%の大幅な減少である。しかも、人口減少の速度にはかなりの地域差があり、とくに北海道、東北6県の状況は厳しいという。

それでは、いま、何をすればよいのか。経済変化のトレンドからすれば必然ともいえる大学生の学力低下問題を、解決するとはいわないまでも和らげるために、個人の努力のレベルにとどまらない政策のレベルで、私たちはどのような対策をたてることができるだろうか。4. および5. は、この困難な課題に、著者なりの解答を与えることを課題としている。取り扱われる論点は多岐にわたるが、しかし、その取り上げ方はいささかアドホックであり、残念ながら十分に整理されているとはいいがたい。そこで、ここでは、それぞれの対策が何を目的としているかという観点から、著者が提起する論点を大きく2つに分けて、それぞれの内容を整理・検討してみることにしよう。

第1は、初等・中等教育レベルの日本人の学力全般を向上させることを目的とするものである。これには、(旧)教育への公財政支出を増やして、クラスの少人数化をすすめる、(用)国際的に学力水準がトップ・レベルにある国に学んで、教育=社会システムの改革を行う、(火)学ぶ順序や時期を見直すなど、教育方法を再検討する、といった対策が含まれる。このうち、(旧)については、著者は、効果が明らかでない上に、教員数の増加によって教員の質が低下する可能性が高く、「積極的に賛成できない」としている。

それに対して、(用)については、フィンランドと韓国という、歴史と文化がまったく異なり、教育=社会システムにおいてもきわめて対照的な両国が、いずれも学力面で世界のトップ・レベルを誇っていることに注目し、これらの事例に学ぶべきだと力説している。著者によれば、両国は、対照的なアプローチをとりながらも、学習者の主体性=「やる気」を引き出すことに焦点を当てている点で共通しており、この点をこそ日本は学ぶべきだとする。(火)については、数学者の小平邦彦氏の意見を援用しながら、小・中学校では子供のときに習得しなければ身につけるのが難しい事柄を中心に教育を行うべきで、そうした観点から各教科を教える時期と順序を抜本的に見直す必要があると問題提起している。

評者は、(用)や(火)のような著者の提案の意義を否定するつもりはない。著者が提出した観点はいずれも新鮮であり、今後さらなる実証研究や実験データの積み重ねによって掘り下げていく価値のあるものだと思う。だがしかし、これらの方策は、それまでの章で著者が主張し

てきたところと、論理的に齟齬をきたしているのではないだろうか。というのも、他の先進各国と比較して、日本の学力水準が現在でも高い水準にあるのであれば、これをさらに引き上げるのは容易ではないはずだからである。

むしろ、より期待が持てるのは、初等・中等教育レベルの学力全般ではなく、大学入学者の学力に焦点を絞って、その向上をめざすという、第2のアプローチなのではないか。入学選抜方法の改革についての提言（103～107ページ）は、——本書では、あまり重要な位置を占めているようには見えないが——まさにこのような目的をもつものといえる。1990年代以降、学業推薦の枠が大幅に拡大し、さらにAO入試のような新しい制度が導入されたことで、大学の選抜制度が一気に多様化したことは、よく知られている。その結果、一般入試で入学する生徒の割合は年々急速に低下し、2008年現在では56%にまで低下している。もはや、大学に入学する生徒の半分は、受験競争のプレッシャーから解き放たれているのである。こうした状況下で、既述のように家庭学習をまったくしない高校生が増え、学習する層と学習しない層への二極化が進行するのは、至極当然のことといえよう。

事実、著者が述べるように、「一般入試で、筆記試験を経由してくる学生の成績は、一般的により傾向があり、AO入試、推薦入試は出来不出来に大差がある上、平均成績は一般入試で入学した学生と比較して低くなる傾向にある」（104ページ）。AO入試や推薦入試は、本来、学力検査だけに偏らず、学生の能力を多面的な角度から評価することを目的としている。しかし、18歳人口が減少する中、一部の大学では、これらの選抜方式が事実上経営安定化のための「青田買い」の手段として利用されていることは、もはや周知の事実である。このような現状をふまえて、著者は、推薦入試やAO入試であっても、最低限の学力水準を前提としたものでなければ意味がないと指摘しているが、これはきわめて妥当な主張であるといえよう。この点については、かねてから評者も、ヨーロッパの経験に学びながら高校卒業レベルの資格試験制度を導入し、そうした資格を大学進学のための必要条件としたらよいのではないかと考えてきた。

このような構想は、もはや机上のプランの段階を過ぎ、高校や大学関係者の間で実現に向けた具体的な動きが始まっている。ちょうど、この書評を執筆している最中（2009年2月8日）に、『朝日新聞』は一面で、大きく「学力確保へ高校・大学連携 新たなテスト検討」と題する記事を掲げ、次のように報じた。

「高校段階の学力を測り、大学入試などに活用するための「高大接続テスト（仮称）」を、高校や大学の関係者が集まって研究し始めた。実施方法などを含め、10年秋の試案とりまとめを目指す。接続テストは学力低下が指摘される大学生の質確保につなげる狙いもある。」

もちろん、導入に向けては幾多の困難が予想され、実現への道のりはなお遠い。『朝日新聞』は、そうしたハードルのひとつとして、高校の教育現場に与える影響の大きさをあげ、高校側の反発も予想されるとしている。だが、反対の声が上がるのは高校だけでなく、大学でも同様なのではないか。本格的な学力検査が大学入学の必要条件とされることで、少なくとも一部の大学にとって、学生の確保がさらに困難となることは必定と考えられるからである。それだけではない。高校教育のレベルで、学力試験によって大学進学者の質を保証する制度が導入されるならば、大学についても、同様に厳格な卒業認定のシステムを整備し、卒業生の質を保証すべきだという声が、かつてないほど強まることは容易に想像される。こうした出口管理の強いプレッシャーは、さらに大学4年間のトータルな教育の内容を根底から問い直し、新たなるシステム化を模索する果てしない改革の道程へと、私たち大学人を駆り立てていくかもしれない。

思えば、大学生の学力低下の責任をひとえに文部科学省に帰すことができた「ゆとり教育犯人説」は、大学人にとってあたかもぬるま湯につかっているかのような、居心地のよさを与えてくれるものだった。書評を終えるに当たって、このような幻想を容赦なく吹き飛ばし、私たちが厳しい現実の前に立たせてくれた著者に、あらためて感謝したい。「学生たち、ゆとられちゃってますから」とさじを投げるのは、社会的責任を担うまっとうな大人のすることではないのだから。